

## 【今渡～大井宿】

2004年04月02日(金)	雨 のち 曇り 時々 晴
距離	40.55km
名鉄・日本ライン今渡駅スタート	09時00分
JR恵那駅着	16時48分
所要時間	7時間48分

休みを取り、1週間前に続いて中山道を走ることにした。あまりにも間隔が短かったので、この1週間は地図作りが大変で睡眠不足になってしまった。また仕事も期末で根を詰めることが多く、肩の凝りはピークに達していた。天気予報では降水確率が高く、雨は避けられそうにもなかったが、できる時にやりたかったのと気分の高まった時に実行するのが一番良いと思ったからだ。当日は5時半頃に家を出るが、この時はパラパラ小雨が降り始めたところだった。前回同様、車内にてパンで食事をとり、米原で乗り換えて岐阜には7時半過ぎに着く。この頃は本降りで厚い雲に覆われていた。こんな天気の時名鉄・新岐阜までの移動は辛い。名鉄に乗り換え、日本ライン今渡には8時48分に到着。この間に先週に通った中山道を電車の窓から振り返りながら眺めると鏡川や新鏡川などあちこちで桜が満開となり、目を楽しませてくれた。途中から外はかなり強い雨に変わっていた。天気予報では午後晴れるとあったので、大丈夫だろうと樂觀する。しかし、今回は山岳地帯に入るので足場が悪くなっていないか心配だ。

缶コーヒーを飲んで9時ジャストにスタートする。走り出すと流石に強い雨と風もあり、やや肌寒く感じる。前回曲がった県道を今度は右折、歩道がないので注意を払いながら進む。交通量は多く、大型車も多い。するとまだそんなに雨を受けていないが、いきなり身体が冷えたのか便を催した。バイクショップがあったのでトイレを借りる。家を出る時に排便したのに何故こんなに早くと先を案じた。そして、身体も重く調子は相当悪そうだ。やはり疲れが溜まっている。強い雨に変わり、身体がどんどん冷えていく。JR大多線踏切を越えると国道21号線と合流。ここからは歩道は整備されていた。車道と歩道の間に「ハナミズキ」が植えられ、小さな葉を付けていた。何故か心が和む。この辺りから緩い上りになっていた。9時半頃になるとやや小雨に変わった。この辺りの国道21号線は雨を吸収する粗い路面になっていた。

道路右から少し入ったところに「浄覚寺」という立派なお寺があった。本堂の階段もあまりにも綺麗にしてあるので濡れたウエアで座ることを慎んだ。再び、国道21号線に戻ると道端に「伏見宿本陣跡碑」があった。国道沿いとはいえ、若干の風情は感じられるが、これだけ車が多いと宿場イメージは薄い。いつ



の間にか伏見宿を越え、国道から旧街道に若干迂回しながら進むと国道合流地点に「比衣一里塚跡碑」があった。ここからの国道21号線は歩道がなく、また強い雨に変わり、雲もより厚くなってきた。まだ10kmも来ていないにも関わらず、もうバテバテだ。吐きそうになることもあった。初めてコンビニを国道筋で発見したが、寄らなかった。この後、中山道では恵那までなかった。先に進むと「鬼首塚」が国道脇にあった。ちょうど今渡から50mほど上っていた。左の山肌には濃い緑の中に点在する桜の木々の色が鮮やかだ。地図ではこの辺りで右折するが、信号表示と地図表示が違い、曲がる場所を間違えた。影響はない。名鉄の終点、御嵩駅の場所がわからないので写真館で聞くとすぐ先だった。



駅交差点の角に「願興寺」という天台宗の立派なお寺があった。平安初期の815年に創建された寺で「奥美





濃の正倉院」と呼ばれており、重要文化財がたくさんある。満開の桜に立派な本堂、門構えも素晴らしい。ここでまた排便するが、雨で身体の消耗が激しく、やや下痢気味になっていた。名鉄最終駅の「御嵩駅」は願興寺の斜め向かいでやや奥まったところなのでわかりにくかった。「中山道みたけ館」は御嵩宿の情報、文化の発信基地で、中に入ると図書館、郷土館になっていた。案内図を貰う。横の「野呂家本陣跡」は建て替えたもので、外からは門構えしか見えない。10時半を回った頃に雨は上がっていた。御嵩は山に囲まれ、街道の雰囲気をつんだんに残した街だった。この辺りから道案内も充実していた。もう完全にウォーカーになっていた。国道21号線に戻り、食べる場所を探すがない。山岳コースになるとまず食堂はないと思うので、何とか食べないといけない。



国道21号線沿いに「和泉式部廟所」があった。『ひとりさへ 渡れば沈むうき橋に あとなる人はしばしとどまる』と石碑には刻まれ、平安時代の女流歌人、和泉式部の墓である。その先に喫茶店があったので入る。ビーフカレーを注文するが、モーニングしかないと言われたのでモーニングを注文。ミックスジュース、トースト、サラダ、玉子があって、473円と安かった。しかし、トーストは喉が乾いていたので食べにくかった。国道から左に入り、ついに中山道美濃路山岳コースに向かうことになる。

ここからは中山道と「東海自然歩道」が大部分同じコースになる。わかりやすい表示も行き届いている。今までで一番表示が多かった。農村地帯に変わり、この先がアップダウンの連続に変わる。先ず、石垣と石畳の「牛の鼻かけ坂」、急







な上りだが、短かった。雨の影響で地盤は軟らかい。すぐに舗装道路に出ると中年のご夫婦とすれ違った。中山道を歩かれているようだった。左斜め上に「耳神社」があった。珍しい耳の病気にご利益があるそうだ。すぐに右への案内板あった。「謡坂の石畳」が見える。右の民家の前には「橋本鶏二の大きな句碑」があり、『錦織の泉の水も錦かな』と刻まれていた。謡坂の由来は西から来た人は急坂なので元気付けに歌を謡って耐えたところからきているそうだ。先に「左マリア像、右御殿場」の道標があった。「聖マリア観音」を見るために横に逸れると舗装道路沿いにあった。この辺りに隠れキリシタン集落があったようで、大村湾の嬉野と似ている。



石畳が終わると舗装道路に変わり、「一呑の清水」が見える。ここは岐阜の名水でもある。上りは続き、街道脇には石垣のある家が多い。その先には養鶏場があったが、ここの鳥は大丈夫なのか。鳥を食べない私でも気になる。また急に便を催す。雨は止んだが、曇っているためウエアが乾かず、身体が冷えたためだろう。木々の中に入って野糞した。トラックが通り、隠れられる場所ではないのでそれらしき姿には見えただろうが、気にするほどのことでもない。また地道に変わると車が入り込んで行った。右にログハウスのレストランがあり、そこのお客だった。ここは「御殿場」だ。左の「物見峠」の休憩所には「木曾の御嶽山」も天気が良ければ見えると書かれていたが、邪魔な木立が増え、難しいみたいだ。ここで標高352mだった。

この後は一気に津橋まで下りが続き、途中からは舗装に変わっていた。この下りは「諸之木坂」というらしい。「津橋」は標高256mと書かれていた。津橋の集落で気が付いたのは田や畑の脇に白い円錐状のものが置かれていた。これは肥料や器具を家から運ばなくても良いように近くに置いてあるようだった。小さな集落なので





盗んだりされないからであろうと推測する。少し先の左側に大きな**岩が田の中にポツンと見える**。何とも不思議な光景だ。集落の外れには綺麗な公衆トイレがあった。日差しが強くなり、暑くなってきた。ここからは「**ふじあげ坂**」といい、地道が続く。最初は道路脇の溝がコンクリートではなく、石が積まれて作られていた。清流には優しい気配りだ。その後は森林、竹林の狭い上り道に変わった。しかし、落ち葉で下は歩きやすい。薄暗く、女性がひとりで通るのは危険に思えるような場所が続く。人とすれ違うことはなかった。



ここで御嵩町は終わり、**瑞浪市**に変わる。そこに「**鴨の巣一里塚**」があった。ここからは一変し、道幅が倍ほどになり、綺麗にバラスが敷かれていた。この先はやや平坦に近かった。ハイキングコース出口付近の急な下り坂に「**秋葉坂三尊**」があった。石窟が三つ並んでいる。その中に石仏が一体ずつ安置されていた。坂を下りると「**平岩**」集落が見え、ようやく舗装道路の明るいところに出て来られた。ここにも自販機はなかった。ここからは舗装道路が続いた。御嵩から、走ったり、歩いたりが続いている。朝ほどの苦しさは若干ではあるが解消してきた。



ようやく「**細久手宿**」に入ることができた。空は先ほどよりどんよりしてきた。先ず「**日吉・愛宕神社**」の2つの鳥居が目についた。脇本陣跡は草の生えた空地だった。公民館のようなところに**東海自然歩道の「星あかり夢街道」**の大きな表示板があり、その横に中山道の案内板がある。標高は420mとあった。そして、ようやく自販機に有り付けた。炭酸系のビタミンの入ったドリンクが最近では美味しい。「**本陣大黒屋**」は身逃してしまったが、屋根の両端に卯建が上がった平入りの二階建て、看板には「**中山道細久手宿(尾張藩定本陣)旅館大黒屋**」とあるそうだ。昔の面影を残す唯一の建物で山岳地帯の美濃路では唯一の現在も泊まれる宿だ。そ



の先には「**庚申堂**」も見た。細久手宿は大湫宿と御嵩宿の間が長いので、6年遅れて新設された宿場のため、街らしい雰囲気もあるが、短くて印象は強くなかった。細久手の東の分岐には「**日吉第二小学校碑**」は庭園のような感じで奉られていた。

雑木林の林道に変わり、「**奥之田一里塚**」があった。また「**モーターランド**」という看板があり、強烈なエンジンとタイヤのスリップの音がする。レーシングコースのようで平日だがドライバーが練習をしているのだろう。この音は長い間続いた。この辺りはどちらかというと平坦に近く、工事建機が入っていたり、荒れ果てた倉庫があっ





たり、寂しいところなのに所々に家があったりするが、生活の匂いが感じられない。何故か不思議なところだ。左に「**弁財天の池**」が見えた。天保7年(1836年)に建てられたという弁財天の宮が中央に祀られているようだ。その先で地図では右が中山道だったが、案内には左が「大湫宿」とあった。変だなあと思いながらも、案内通りに行ってしまう。途中に「**北野神社**」があり、手入れされた神社前の桜は3分咲だった。その先で間違っていることに気付かず八瀬沢が見つからないと焦る。地元の人車の車が通りかかったので尋ねるとコースを間違って東海自然歩道を行ってしまったことがわかった。このまま先に行けば琵琶峠に行けると教えて貰い一安心する。「**八瀬沢**」**集落**は家も少ないが、灯籠、池、手入れされた松、桜、観葉植物などなど心の豊かさを与えてくれる集落に思えた。そして取り囲む自然も本当にのどかで心地よい気分になる。



ここまでは舗装道路だったが、琵琶峠の案内通り、左の地道に進むと長さ20cmもある枯れ葉が地面いっぱい落ちていた。何の葉だろうかと不思議に思う。「**琵琶峠の石畳**」が見え、県道を挟んで続いていた。昭和45年に発見され、日本の街道では最長の600mもある石畳で大きな石なので平坦で足には優しいと感じた。入口には水飲み場があったので冷たい水を何杯も口にする。上って行くと先ず「**八瀬沢一里塚**」があり、その先の

「**琵琶峠頂上**」は標高540mと美濃路最高点で「**和宮歌碑**」があった。『**住み慣れし都路出でて けふいくひ 急ぐともつらき 東路の旅**』と心が詠われている。ここは落ち葉の中から、石畳が浮き出して見えるほど、落ち葉が多かった。これから先は下りになり、下り切ると「**琵琶峠東上り口**」の石碑があった。



ここからは舗装道路で大湫病院の前を通り過ぎると「**烏帽子岩**」「**母衣岩**」という2つの大きな岩が道端にあり、「**中山道二岩**」の石碑に説明があった。もう「大湫宿」に入っていた。この標高は500mくらい。先ず、「高札場跡」と「**中山道大湫宿**」の大きな碑があり、横に高札場が復元されていた。大小10枚と多くの高札が掛かってい





た。「神明神社」が見え、横の樹齢1200年ともいわれる大杉は大湫に住む人々の精神的支えになっているという。神明神社は幾つか見てきたが、鳥居の笠木と柱は丸木で、貫は角材になっていた。「脇本陣跡」は建物、門、石段、庭まで当時の面影を残している。「大湫宿本陣跡」は大湫小学校の校庭になっているが、手前の石畳が面影を残しており、上ったところに「皇女和宮歌碑」があった。『遠ざかる都と知れば 旅衣一夜に 宿も立ちうかりける』『思いきや 雲井の袂ぬぎかえて うき旅衣袖しぼるとは』。大湫の街並みは昔ながらの雰囲気、金融機関も当時の建物風に作ってある。東海道の関宿はあまりにも人工的過ぎる間があるが、大湫は自然な雰囲気に感じる。急に厚い雲が出始め、今にも雨が降りそうになる。風も強くなり、冷たく肌寒く感じる。体調が悪いだけに心配だ。



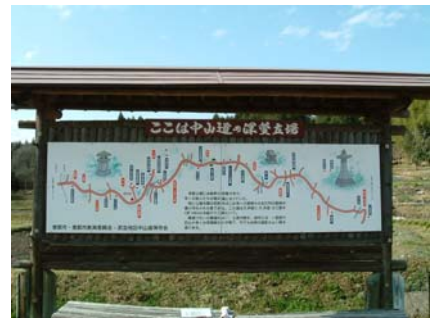
ここからは右に曲がり、「十三峠」に向かう。上り坂のところに道標があり、「東十三峠、右大湫宿(左江戸へ九十里半、右京へ四十三里半)」と書かれ、十三峠の説明の石碑もある。更に「中山道しゃれこ坂」の石碑もあった。舗装の林道の「寺坂」、「山の神坂」を上って行くと右手に茶畑が見え出した。短い坂を上り切ると「牛がほら坂」、「しゃれこ坂」と今度は一気に下りになった。県道を渡り、薄暗い雑木林の中の地道、「地蔵坂」を進むと「尻冷やし地蔵」があった。杉林の中に石地蔵が立てられており、湧き出す清水の前に立っている地蔵が尻を冷やしているように見えるところからこの名が付いた。徐々に道路にはウンボが入ったようで、地面は砂に変わってきた。そのため水溜まりやぬかるみが目立つようになっていた。左は「中仙道ゴルフ場」でコースの整備のため、建機やトラックがこの中山道を通ってゴルフ





場の整備をやっているようだ。それにしても街道をこのようなゴルフ場の整備の道具に利用するとはとても嫌な気分になる。県道を渡ってから、「曾根松坂」まではずっと上っていた。その先にあった「中山道巡礼水」の水は現在枯れていた。「五郎坂」を下って行くと「権現山一里塚」が見えた。ここは江戸から90里、京まで44里にあたるところで、江戸からは2/3来たこととなる目印だったようだ。

ここからはバラスが敷かれ、足元はしっかりしてきた。急な檜ノ木坂の石畳、五郎坂、権現坂を下ると「大久後」の数軒の民家の横を通る。長い下りは続く。「権現山」の上り口と書いてあった。山から一旦外れると「中山道」と書かれた大きな石碑が道端にあり、風も気持ち良いので一休みし、地図を確認する。また、右の山中に入って行く。途中に道路を横断するところがあるが、「三城峠」の石畳でその後は薄暗い山中を抜けて行く。ここも石畳だが、半分以上は土が埋まっている感じの急な下り坂だった。その先で集落が見え、「深萱立場跡」で大きな案内板が立っていたので



しっかり確認する。現地の案内板で現位置を確かめるのが一番だ。ここは「田尻」という集落になる。国道18号線を横断するところに「藤村高札場」があった。空は青く晴れ渡ってきた。



ここからはまた上り坂に変わる。民家の横にまさにわび、さびの世界そのものようなコケが生え付いた山水受けの壺や竹の筒があった。バツクの石垣にぴったりだ。思わず、水を口にする。その先の「紅坂の石畳」は右端がコンクリートで上り易くしているのかわからないが、違和感があった。実際歩いてみると石畳の方が歩き易かった。地道を更に上ると「紅坂一里塚」があったが、このの標柱は傾いていた。緩い「平六坂」を下って行くとその先は「四ツ谷」集落でここも農村だ。百姓にとっては狭く、形が悪い水田での米作りの手間は大変だが、ほ場整備されていない

昔のままの田畑は気持ち良い。立場変われば、見た目が第一印象になってしまう。ウグイスの鳴き声が出て、春らしく感じる。この四ツ谷は参勤交代の大名が通ったところから「大名街道」と呼ばれたそうだ。



また地道に変わり、「乱れ橋」と「乱れ坂」が見える。乱れ橋は昔、『石はしる音すさまじき流』と言われた流れに架かった大きな橋で名の由来は坂が急なために行列が乱れたからとか、お女中の着物の裾が乱れたからとか言われている。乱れ橋の下を流れる清流は心地よい音を立てながら、澄んだ冷気を与えてくれた。乱れ坂は最初、急な石畳でその後も緩く上っていた。山





道を進んで行くと右に「首なし地蔵」があった。山中の首なし地蔵はやや気持ち悪く感じた。少し進むと薄暗い林の中から、ようやく陽光が差し込み、明るくなった。やや広いところが「榎ヶ根立場跡」でここが名古屋・伊勢への分かれ道となる「伊勢道追分」でもあった。「右西京大坂、左伊勢名古屋道」と道標には刻まれていた。



一旦、舗装した道路に入るが、これが中山道かと思うほどダンプカーや大型トラックが走り、ホコリがひどかった。まさか恵那までこのような道が続くのかと思ったが、右折してすぐに地道に変わり胸を撫で下ろす。「榎ヶ根公園」は「桜百選の園」という大きな石碑があり、下を走る中央道や大井宿を見下ろせた。恵那といえば、中央道一長い「恵那山トンネル」が印象深い。「榎ヶ根一里塚」はすぐ先にあつて、横にはトイレや水道も設置された落ち着いた憩いの場があった。ちょうどこの下がJR中央本線の「新榎ヶ根トンネル」になる。また山中となり、「西行塚」付近からは急な石畳の下りでゆっくり走ったが、若干ダメージがくるような粗い石畳だった。「西行塚」を出ると長かった「十三峠」は終わったことになる。



大湫宿からなので実に三里半、14km近くあった。中央道高架下を潜ると田園地帯が広がり、もうすぐ「大井宿」に入れる。JR中央道の踏切を渡るが、先ほどあった「新榎ヶ根トンネル」と駅もないのに線路が2本になっており、不思議に思えた。



交通量の多い県道に出る。ここは歩道がなかった。空は澄み切って、気持ち良い。ほとんど歩いている感じだ。「野井みちの分かれ」は五叉路になっており、信号がなかなか変わらないので歩道橋を渡った。タイルの歩道を進むと「永田川」に掛かる「中野橋」から、中央本線線路越しの竹藪の中に鮮やかな濃いピンクに開花した桜が見えた。そのまま真っ直ぐ



に進むと恵那駅前から「阿木川」手前までに行ってしまったのでコースミスに気付き、川沿いに「大井橋」まで行く。大井橋は灯籠が橋の親柱に設置され、廣重、英泉による木曾街道六十九次の浮世絵の陶板が欄干にはめ込まれていて、なかなか風情があった。ここからは再び「JR恵那駅」に戻る。

恵那駅は駅前に大きな岩のある綺麗な駅だった。今渡同様に駅のトイレで着替え、時刻を見る。予定より早く着いたので、できる限り早く帰ろうと思い、セントラルランナーという快速電車に乗ろうとすると特別料金がある



それで結局、普通の快速で帰ることにした。結果的に駅に着いてから1時間近く待ち時間があり、駅前に秋田名物「稲庭うどん」の店があったので卵とじうどん(700円)を注文。稲庭うどんは秋田100kmへ行った時に角館で食べ、美味しかった思い出があったが、この店のうどんも疲れていたのも美味しかった。更に駅前にはコロッケ屋があったので、串カツと牛コロッケを買って、駅の待合室でビールのアテにした。少し食べ過ぎて苦しかった。18時前の名古屋行きに乗ると約1時間で名古屋に着けた。電車の窓越しに風景を眺めながら帰れるのは楽しいものだ。名古屋と米原で乗り換えし、家に着いたのは21時半を過ぎていた。今回は山岳コースで時間を要したが、写真もたくさん撮ったため、結果的に止まっていた時間が長かった。普通の街道ならもう少し進めただろうが、しかし、いっぱい思い出が残せた美濃路山岳コースだった。





## 【大井宿～野尻宿】

2004年08月06日(金)	曇り のち 晴
距離	40.34km
JR恵那駅スタート	09時14分
JR野尻駅着	18時23分
所要時間	9時間09分

夏期休暇前日、休暇中に出勤することもある、休みを取って1泊2日の日程で中山道を走ることにした。天気予報では木曾路も連日猛暑のようだ。特に用意するものもないが、1日目は恵那から須原までの約48km、2日目は塩尻に入ったところの日出塩まで約54kmを目指そうと計画する。しかし、暑さでどれだけ走れるかわからないので行き当たりばったりの心境で宿も押さえなかった。大桑村は宿泊場所が少なく、須原の民宿1カ所に電話してみたが、満室と言われた。最悪は野宿か、まあどうにでもなるかの心境で恵那に向かった。予め、「青春18切符」を購入、安く上げようと考えていた。1日乗り放題2300円で済むのはお得だ。

6日は5時半頃の電車に乗って、米原と名古屋で乗り換え、恵那には9時10分に到着できた。朝食はパン2個で済ます。少な目の方が夏は良いだろう。名古屋駅でマス寿司を1個買うが、酢が入っていると美味しい。このキヨスクのレジは黒人店員で釣り銭などが大丈夫かと思ってしまった。差別してはいけないが、ここまで外国人労働者が入って来たとはやや驚きだ。すべて電車は座れ、途中も少し眠れたので楽だった。木曾路にはコンビニが極めて少ないのはHPから知ったが、実際自分の目で確かめないとわからないと思う。

4月に恵那までは来たが、今回は駅前の地図をしっかりと見てスタートした。空はどんより曇っており、風がないので湿度が高い。少し走り出すと、身体も足も相当に重い。この時、今回は相当歩きになるなあと直感した。コースを間違えないように駅の正面から2筋目を左折し、地図をよく見ながら進む。阿木川の「大井橋」を渡り、コの字形に柵形に入る。「大井宿」には6回直角に曲がる場所がある。街道脇に「CoCo」があったので、氷のロックを買い、ボトルに詰め込む。ボトルが熱くならないようにタオルで巻いた。残りは手で持って進むことにした。氷が溶け出すとそのまま飲めると思ったからだ。これも初めての試みだった。



歴史を感じさせてくれる家並を進む。蔵のあるなかなか**重厚な家並**も多い。5番目の曲がり角手前に「**中山道ひし屋資料館**」があった。ここは大井宿の「町屋体験施設」となっている。5番目の角に「**大井宿林家本陣跡**」があった。岐阜県史跡となっている風格のある門構えの屋敷だ。家並の中、緩い坂を上って行き、「明智鉄道」を潜ると「**菅原神社**」の鳥居が見えた。中央道の上にある橋を渡った後、右折が中山道となる。親切にコース表示があるので間違えることはないが、地図だけはしっかりと見るようにした。またきつい上りがあった。木曾路は小刻みに、しかも急なア





ツブダウンが多い。空は薄い雲で覆われており、湿度が高いので、もう汗びっしょりだ。それでも負荷の少ない下りだけは走れた。

上り切ったところに「**甚平坂ポケットパーク**」があり、地元の橋本鶏二の『初蛙 廣重の絵の 峠かな』の句碑があった。ここからは天気が良いれば遠くまで望めると思うが、曇っているのが残念だ。緩く長い下りが続いた。集落が切れるとそこは田園地帯、今年の稲は豊作のようで、どこも



頭を垂れていた。この辺りは立派な家が多い。恵那から中津川の境

に大きな「**中山道、是より大井**」と刻まれた「**中山道の石碑**」があった。また「**広久手坂**」と呼ばれる急な上りもあった。「**茄子川村**」という表示があり、交差点角に「**秋葉道常夜燈**」と「**篠原茶屋本陣跡**」があった。その先



に急坂が見え、高架下を潜って竹藪の中を進むとそこが「**坂本立場跡**」だった。坂が続くので完全にへばっていた。その先はやや平坦に変わり、ずっと歩いて進んだ。中平のY字路で整備された広い道路と合流。自販

機で冷たいコーヒーを飲む。道路は広くなっても**蛇行した街道らしい雰囲気**に変わりはなかった。右の国道19号線沿いに“ファミリーマート”と“餃子の王将”が見えたので、王将で食事しよう逸れると11時開店と書かれており、開店まで15分早かったので先に進んだ。その先は中央道の中津川インターで中山道が消えたので付替街道を進んだ。この辺りのコースはややこしいが、わかりやすい中山道の表示があったので道に迷うことはなかった。



やし中華の出汁には酢が入っている。その先の中津川の上宿に向かうと「**上**」一里塚らしい一里塚と遭遇できた。中津川に入って行く。まず「**上宿**」があり、と「**中津川宿**」の家並に変わる。この夜になると灯りが灯されるのだろう。



落ち着いた良い雰囲気だ。中津川は大きな街なので街並みも長い。「**清酒“恵那山”の蔵元**」があり、卯建が見える。この辺りは**卯建の上**が**がっている家**が多いようだ。街道がややこしかったため、本陣跡や脇本陣跡はコー



スを間違え、見るができなかった。その先の四つ目川を渡り、正規のコースに戻る。「中津川宿往来庭」という本陣をイメージしたような街の博物館があった。ここは中津川の中心地らしい。その先の幅の広い道路を左へ行くと「中津川駅」だ。時間は11時40分、暑さで完全に参っていた。

真っ直ぐに進むと左に住友系の商売をしている古い街道の姿そのままの倉庫が見えた。上り坂には「高礼場跡」があった。更に坂を上ると国道257号線があり、ここを横断してから、左斜めに進むのか、右斜めに進むのかわからなくなったので、角にあった介護の店の方にどちらに進むのか聞いた。ここは確かに中山道の表示がなく、わかりにくいところらしい。「市の方へ表示を設置するようにお願いします」と仰っていた。振り返

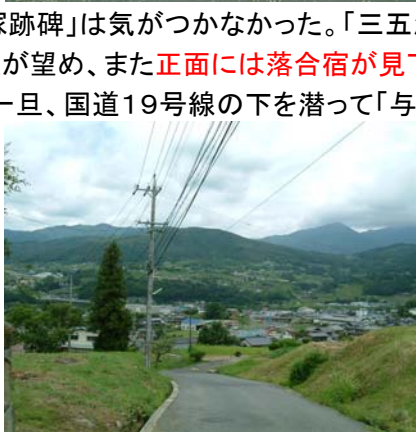
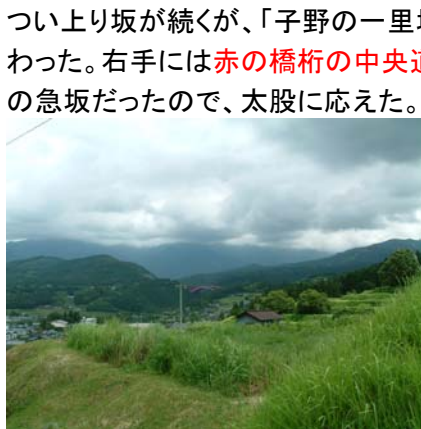


るとここからは中津川宿が一望でき、見晴らしが良いところだ。聞いたとおり、左斜めに進むと石畳坂があり、この辺りを「茶屋坂」と呼ぶそうだ。道路は綺麗に整備されていた。実際は急なS字型なので地図で見ると直線になってしまう。途

中にある芭蕉句碑には『山路来て何やらゆかし すみれ草』と刻まれていた。突き当たりは国道19号線でトンネルを潜るとその中に「歴史の道中山道」という案内板があった。これは非常にわかりやすかった。



この先はうっかり真っ直ぐに行くとき行き止まりになるところもあるき



つ上り坂が続くが、「子野の一里塚跡碑」は気がつかなかった。「三五沢」辺りからは一気に急な下り坂に変わった。右手には赤の橋桁の中央道が望め、また正面には落合宿が見下ろせた。その後は短い15%くらいの急坂だったので、太股に応えた。一旦、国道19号線の下を潜って「与坂」に出て、今度は国道19号線の歩道橋を渡って「落合宿」に入った。家並に突き当たったところを右折する。自販機前で休憩していると店のご主人が中山道のコースを教えて下さった。落合宿を過ぎると「木曾路」山岳コースに入るの、もう食べる場所も少なく、エネルギー吸収を心掛けた。



落合宿は静かな宿場だ。「落合宿本陣跡」は井口家で加賀の前田家から贈られたという門があり、中山道では現存する数少ない本陣建築で今も住まわれながら保存されている貴重な遺構である。横には「落合宿本陣」の標石と「明治天皇落合御小休所」の石碑が立っていた。向かい

側にJAスーパーがあったので立ち寄ってアイスクリームを買い、歩きながら食べる。その先の黒壁の蔵がある家はクラフトショップになって



いて、この静かな落合宿とイメージが合わない感じがした。しかし、蔵は良い。更に**常夜燈と昔のポンプ**があった。ポンプの水で身体や頭を洗うと気持ち良かった。案内に従って先に進み、川沿いの工事現場の横を通り過ぎると落合川に掛かる「**下桁橋**」があり、上の砂防堰堤が簾のように涼しげに水が落ちていた。ここはヒンヤリした空気だった。ここからは上りが続いた。案内に沿って右に折れると「**医王寺**」が右側にあった。



その先に岐阜県指定史跡「**落合の石畳**」が見え始めた。ほとんどが復元されたものらしいが、素晴らしい感触だ。全長は800mと書かれていた。美濃路にある琵琶峠の石畳と比べると綺麗に敷き詰められているように思えた。木々の中、湿度が高く、上りなので歩くのも結構きつい。途中、休憩できる茶屋の横に何と**ウォータークーラー**が設置されてあった。まさに極楽気分で冷たい水を口に、デイパック内のボトルにも注いだ。これは林業されている人のためだと思う。少し行くと「**十曲峠**」の案内板があった。長野県と岐阜県境が十曲峠のようだが、何も県境の表示はなかった。その場所はわからなかった。その頃、空は完全に晴れ渡っていた。



そのすぐ先に「**新茶屋一里塚跡**」があった。ここは一里塚古跡の碑と解説板もあった。「新茶屋」には民宿があり、その向かい側には藤村の筆による「**是より北 木曾路**」の碑が、その横には芭蕉句碑、『**送られつ 送りつ果ては 木曾の穂(あき)**』があった。ここの標高は500mくらいのようなのだが、視界が広がったせいか、湿度も下がり気持ち良い。



荒町の集落手前には**休憩所**があり、**ぽたんの**ような**ピンクの花**が鮮やかだった。展望にも良いところだ。道端に正岡子規の『**桑の実の 木曾路 出れば 穂麦かな**』という句碑があった。その先には「**諏訪大社**」と「**馬籠城跡**」の解説板があった。まだ緩やかな上りは続いている。その先は一気に景観が変わり、明るい石垣の先に賑やかな雰囲気が出てきた。ここからは「**馬籠宿**」だ。交差点には馬籠宿の石碑と案内板があり、店が並んでいた。久しぶりに自販機があったので、冷たい物を飲む。中津川の多くもそうだったが、ここも空き缶入れがなかった。街の景観を守るためか？。真夏ではあるが、観光客やハイカーでいっぱいだった。ランナー姿に周りからは異様な

荒町の集落手前には**休憩所**があり、**ぽたんの**ような**ピンクの花**が鮮やかだった。展望にも良いところだ。道端に正岡子規の『**桑の実の 木曾路 出れば 穂麦かな**』という句碑があった。その先には「**諏訪大社**」と「**馬籠城跡**」の解説板があった。まだ緩やかな上りは続いている。その先は一気に景観が変わり、明るい石垣の先に賑やかな雰囲気が出てきた。ここからは「**馬籠宿**」だ。交差点には馬籠宿の石碑と案内板があり、店が並んでいた。久しぶりに自販機があったので、冷たい物を飲む。中津川の多くもそうだったが、ここも空き缶入れがなかった。街の景観を守るためか？。真夏ではあるが、観光客やハイカーでいっぱいだった。ランナー姿に周りからは異様な



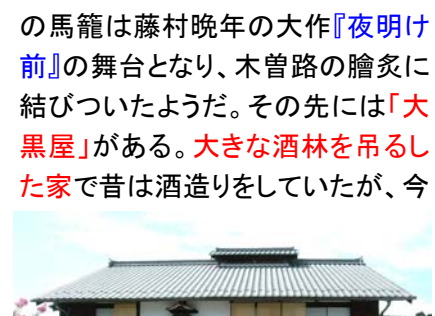


目で見られた。しかし何故か、街道らしくない雰囲気を感じた。この先は石畳で車の乗り入れはできない。馬籠の宿場全体と枳形の詳しい解説板があり、宿の多さに驚いた。更に勾配のある急坂になり、**水車小屋**が左側にあった。14時前で日差しが強く、暑さで参ってきた。そうい



えば、コンビニで冷やし中華を食べて以来、何も食べていなかった。何か食べたいが、予定より大幅に時間が掛かっていることと汗だくの姿では店には入れるような雰囲気はない。

店や宿の前には木々や庭園があり、緑を優しく感じた。西から来ると上り一辺倒だが、この家並と緑が気分を楽にさせてくれる気がした。宿の中心部には島崎藤村の生家である「**馬籠宿島崎本陣跡**」があり、現在は「**藤村記念館**」となっている。ここは黒板塀に冠木門、門の奥の白壁に藤村の言葉『**血につながるふるさと・・・**』。この馬籠は藤村晩年の大作『**夜明け前**』の舞台となり、木曾路の膾炙に結びついたようだ。その先には「**大黒屋**」がある。**大きな酒林を吊した家**で昔は酒造りをしていたが、今



は民芸と喫茶の店となっていた。大黒屋の十代目大脇兵衛門信興が文政9年(1826年)から明治3年まで書き続けた大黒屋日記が藤村の『**夜明け前**』執筆のきっかけになったそうだ。坂を更に上ると外人の観光客の姿もあった。暑いのでみんな汗だくだ。恵那でボトルに入れた氷はまだかなり残っていて、よく持つものだと感じる。宿の端にはまた**馬籠宿の石碑**があり、「京江五十二里半、江戸江八十里半」と刻まれていた。また「**案内板**」には「中山道」と「中仙道」のことが書かれており、当初は「中仙道」だったが、1716年に中部山岳地帯から「中山道」と書き改められたと記してあった。



この先も「馬籠峠」までは上りが続いたが、旧街道と県道が交互になるので、それほど辛くは感じなかった。旧街道はハイキングコースで快適だった。「水車小屋」を越え、「梨の木坂」の石畳を上り、県道と合流したところに「**樹梨**」という**喫茶店**があったので入る。ミックスジュースを飲みたかったがなかったので、アイスコーヒーを





注文した。「汗びっしょりですみません」と言って椅子に腰掛けると「中山道を歩かれていますのですか？」と聞かれ、「一応、可能な限り走ろうと思っていますが、暑さで走れません」と言葉を交わす。「家で作ったトウモロコシですが、食べて下さい」とスイカと盛り合わせた皿を出して下ったので、遠慮なく頂いた。旅先での一期一会、人の親切は有り難い。

道路を横断して旧街道に進むと十辺舎一九の歌碑『**渋皮のむけし 女は見えねども 栗のこはめし 此乃名物**』があった。その先には静かな「峠」の集落があり、山間の街道らしい雰囲気の家並だ。広い道路に出て坂を上ったところに茶屋があり、ここが「**馬籠峠頂上**」で標高801mと表示されていた。長野県境からここ



までは「山口村」になる。この先は「南木曾町」だ。茶屋の横には『**白雲や 青葉若葉の 十三里**』と正岡子規の歌碑があった。時間は14時47分に、予定の半分も来ていない。須原まで行くことはどう考えても不可能で、宿が心配になってきた。ここで左に行けば県道だが、茶屋の横にある狭い山道を下って行く。木立の中、暗く寂しい山中はさすがに薄気味悪い。しかし、これからは長い下りが続く分、上り以外は大部分走れた。ここはハイキングコースなのでトイレが1km毎くらいに設置されていた。この道中はハイキングコースと英語の案内板があった。山の中から急に開けた田の畦道のようなところに「**一石柵の茶屋跡**」と「**一石柵の白木改番所跡**」があった。茶屋跡の向かいには**大きな水舟**があったので、顔を洗う。白木改番所跡には関所門と広場が

有り、休憩所が作られていた。この先からはまた林の中で「男埴川」を右に、左に見降ろしながら進む。途中でサワラの大木(神居木)と書かれていたが、わからなかった。また「男滝」「女滝」の表示があったが、逸れないうちに行けなかったのでカットした。この「男滝」「女滝」は吉川英治の『宮本武蔵』の舞台にもなったそうだ。その先の県道と交差する下りは石畳になっていた。「下り谷」の集落を下ったところにも急な石畳があった。



ここで視界は広がり、ここからは「大妻籠」だ。県道を斜めに横断すると、「**中山道庚申塚**」の石碑と解説板があった。下って行くと民宿が何件もあり、**大妻籠も街道らしい雰囲気**が漂っていた。静かで落ち着いた雰囲気

の中、重厚な民家が並んでいた。川沿いに進むと「**大妻籠 ほたるの里**」という案内板があった。「大妻橋」からの**男埴川を眺めると川底の石は白く綺麗**だ。大きさは上流とあってまだ小さい。その先、中山道は**家の裏を通**



の中、重厚な民家が並んでいた。川沿いに進むと「**大妻籠 ほたるの里**」という案内板があった。「大妻橋」からの**男埴川を眺めると川底の石は白く綺麗**だ。大きさは上流とあってまだ小さい。その先、中山道は**家の裏を通**



るような狭い道になっていた。これも案内がなければ、わからないようなところだ。出たところには大きな駐車場で「妻籠宿」の表示があった。大妻籠も同様だが、この格子に日が暮れると灯りが点くのだと思う。この先の妻籠宿には車は入れないと表示があった。



国道256号線を横断し、坂を下って行くとガイドブックで見たままの山深い中に「妻籠宿」があった。先ず、右手に竹藪があり、観光客の姿もあった。左側には「蘭(あららぎ)川」に掛かる橋があったので見に行く。家並を進むと観光客の数がどんどん増えてきた。観光客の数は馬籠ほどではないが、妻籠には古き良き昔を偲ばせてくれる雰囲気<sup>き</sup>が十分過ぎるほどある。ここは寺下の街並になる。下って行くと木曾の木々を使った土産物屋



があり、見とれてしまう。石段を下ったところで振り向くと素晴らしい趣があった。人工化されていないところが素晴らしい。土産物屋で中山道の思い出にと「ひのき傘」を買う。手作り製で千百円だった。このように整然とした宿場内に汗まみれの旅人は似合わない気もするが、まあ仕方ない。先に進むと馬籠同様に「妻籠宿島崎家本陣跡」があった。こちらは再建されたもので、島崎藤村の母の生家らしい。その向かいになかなか立派な木造の休憩所があったので、休ませてもらう。その先も素晴らしい家並が続いた。脇本陣だった「奥谷郷土館」は総檜造りで再建されたもの







で一般に公開されている。下町になると土産や五平餅、喫茶店など観光相手の店が多くなってきた。妻籠はこぢんまりとした家屋が整然と建ち並ぶ端正な美しさを示しており、宿場内は江戸時代後期の宿の有様をそのまま保っており、その時代を凝縮したように感じた。その昔、妻籠は木曾十一宿の中で、いや日本の代表的な過疎地で、現在は最も活性化に成功した地域ともいわれている。1975年9月に「重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、電柱や電話の柱は町裏に移し、現在のような景観が出来たそうだ。宿の外れの上り坂には「水車小屋」があり、その先に「高礼場跡」があった。妻籠



宿内には自販機は1台もなかった。この先は緩やかに上ったり下ったりしながら南木曾駅方面に向かう。上りでまた短い石畳があった。この辺りの民家はほとんど軒先に庭があり、錦鯉が飼われていた。自販機はなくても、軒先からは溢れんばかりの山水が出ているので水分には不自由なかった。『木曾路にて この暮れのもの悲しさに わかくさの妻呼びたてて 小牡鹿鳴くも』の「良寛歌碑」があった。良寛は私が生まれて初めて買ってもらって読んだ本で、リンカーンと2本立てだったことが強く印象に残っている。「上久保一里塚跡」は松の一里塚だった。案内板と頭上に「一里塚」と刻まれた石碑があった。ここで近くの年輩の女性に話し掛けられ、10分あまり世間話をする。石碑の一里塚は正岡子規の妹の直筆だそうで、熱心な共産党員だったと言われていた。自販機はないが、山水が豊富にあるので助かると話す。「腹が減ったでしょう。家はすぐそこなので、おにぎりでもこしらえようか」と親切な言葉を掛けてもらったが、時間が大幅に遅れているので、お礼を言って先を急ぐことにした。「戦沢の石畳」を下って行くと右手に木曾義仲、巴御前ゆかりの「ふりそで松」があった。この辺りには庭園に大きな水車が回っている民家もあった。

宿内には自販機は1台もなかった。

この先は緩やかに上ったり下ったりしながら南木曾駅方面に向かう。上りでまた短い石畳があった。この辺り

の民家はほとんど軒先に庭があり、錦鯉が飼われていた。自販機はなくても、軒先からは溢れんばかりの山水が出ているので水分には不自由なかった。『木曾路にて この暮れのもの悲しさに わかくさの妻呼びたてて 小牡鹿鳴くも』の「良寛歌碑」があった。良寛は私が



生まれて初めて買ってもらって読んだ本で、リンカーンと2本立てだったことが強く印象に残っている。「上久保一里塚跡」は松の一里塚だった。案内板と頭上に「一里塚」と刻まれた石碑があった。ここで近くの年輩の女性に話し掛けられ、10分あまり世間話をする。石碑の一里塚は正岡子規の妹の直筆だそうで、熱心な共産党員だ

ったと言われていた。自販機はないが、山水が豊富にあるので助かると話す。「腹が減ったでしょう。家はすぐそこなので、おにぎりでもこしらえようか」と親切な言葉を掛けてもらったが、時間が大幅に遅れているので、お礼を言って先を急ぐことにした。「戦沢の石畳」を下って



行くと右手に木曾義仲、巴御前ゆかりの「ふりそで松」があった。この辺りには庭園に大きな水車が回っている民家もあった。

山岳コースから国道19号線、中央西線が見えて来た。左に「SL公園」というD51がポツンと置いてあるところがあったが、あまりにも殺風景だった。街道右側に「園原先生碑」があり、大きな楠の木が後ろにそびえていた。眼下には「南木曾駅」が見えて来た。木曾の山々で採れた木材が山積みされていた。その北側の木曾川に掛かる全長250mの「桃介橋」を見損ねたのが残念だったが、写真には写っていたのが幸いした。時計を見るとスタートしてから30kmで16時41分、7時間半掛かったことになるが、本当にどこまで行けるのだろうか、不安になる一方である。その先でようやく自販機が見つかった。11kmくらい道中にはなかったと思う。店の人に





尋ねると「妻籠前後は保存地区で自販機は置けないことになっている」と言われ、ようやく事情がわかった。右手に「読書小学校」という珍しい名前の学校があった。地名も読書らしい。「三留野宿」の家並は宿場らしい雰囲気漂わせているが、史跡はほとんど残っていなかった。

宿の外れに「与川道の分岐」があり、右が中山道と表示されていた。地図とは異なる。三留野付近は山が木曾川べりまで迫っているため大雨になると山津波が起こり、非常に危険であったため、迂回路として開かれたのがこの道で、「桃の木峠」「与川村」「与川峠」を越えて野尻宿に行ける。そのまま真っ直ぐに進み、「べに坂」を下り、中央西線のガードを潜る。そして、国道19号線の歩道を進むことになる。西陽を遮るものがなく、車の通行量も多いため、暑く辛い中山道に変わる。



ここからの木曾川沿いを「与川渡」というそうで、昔は断崖絶壁の難所も今は景色の良い快適な道である。国道19号線から右の山手が中山道の場合、見落としそうなコースだ。三留野を越えた途端に中山道の表示がほとんどなくなった。確かに中山道が国道沿いとはいえ、何も表示がないとわからないものである。「羅天栈道(らてんかけはし)」とはこの辺りをいうらしい。昔は羅天のと呼ばれた木曾屈指の難所で、藤村の『夜明け前』の有名な書き出しはこの辺りの事を指している。『木曾路はすべて山の中である。あるところは岨づたいに行く崖の道であり、あるところは数十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である』。国道19号線はドライバーが居眠りしないよう居眠り防止の低い音が鳴っていた。かつて「やぶはら高原マラソン」や「御嶽スーパートライアスロン」でここを通った時のことを思い出す。

木曾川沿いなので平坦のように見えてもアップダウンがあり、全体的には上り基調になっていた。ここから見る木曾川は大小様々な岩や石が散乱しており、どれも真っ白だ。山深い木曾の谷の景観は何ともいえない落ち着きがあるように思われる。その先の「柿其橋」から見える



「柿其峡」には気づかなかった。気温は29℃を示しており、山間から強い西陽を受ける。ボトルのロックアイスも底をついた。自販機が少ないので喉が乾いて仕方ない。国道の歩道反対側に自販機があっても車の通行量が多いので、危険を感じ横断は控えたためだ。国道19号線から別れ、木曾川側の旧道を進むと「十二兼駅」があった。ここは無人駅でほとんど家もないところにポツンと建っていた。当然、自販機などない。時間は17時43分を示していた。予定の須原駅まではとても無理なので、次の野尻駅を今日のゴールにしようと決める。ただ、宿が見つかるか不安いっぱい進む。その先、地図では国道19号線の山手に進んだ後、国道を横断して「野尻宿」に向かうようになっているが、何故かJRより木曾川沿いを進んでしまった。その頃、「大桑村」に入っていた。地図を見ても場所がよくわからなかったが、木曾川の対岸に温泉リゾート施設「フォレスパ木曾」が見えていた。野尻まではそんなに遠くない。途中でJRの踏切を渡り、道なりに進むと中山道だった。

宿泊施設を予め調べた結果では野尻に3軒しかなかったので看板を探しながら進む。「野尻宿」はくねくねと曲がった道に軒を寄せ合って家が並んでいた。軒先には水が出ている家が多くあり、また庭のある家も多かった。途中で一軒、民宿の看板が上がっていた。とりあえず「野尻駅」まで行くことにした。わかりにくかったので尋ねると過ぎたとのこと。確認すると、やや入り込んだところにあった。時間は18時23分、ああ～、疲れた。

これからの宿探しが大変だ。最悪、野宿も覚悟するが、冷え込みそうだ。一旦、来た道に戻って、看板の上があった場所まで戻ることにした。すると途中で「その旅人、喰っていかなか！」と呼び止められた。地元の方10人くらいが家の脇でバーベキューされていた。宿を尋ねやすいのでお邪魔させてもらう。レタスで肉を包んだ





ものを頂くが、普段と違って野菜が美味しい。ビールも勧められる。宿のことを尋ねると「泊まる民宿なんてこの辺りにはないぞ」「この家で泊めて貰え」と進められる。家主のKさんも「大きな家に2人で住んでいる。昔は乞食も泊めたくらいだ。旅人、気にせずに泊まって行け」と親切に言って下さったので厚かましいとは思いながらも野宿は困るのでお言葉に甘えて泊めて頂くことにした。風呂で汗を流し、梅酒などを頂きながら、世間話をするとKさんは何と私の会社の先輩だった。いろいろと話を聞き、23時頃布団に入る。エアコンはいらないが、いつもより蒸し暑いと言われて

いた。格子の先は中山道、山水の豊富なところなので夜中、溝を流れる水の音がよく聞こえた。夜の木曾路は気温が下がり、肌寒かった。



## 【野尻宿～原野】

2004年08月07日(土)	晴 のち 曇り
距離	33.40km
JR野尻駅スタート	05時52分
JR原野駅着	14時03分
所要時間	8時間11分



少し明るくなり始めた4時半に目が覚め、5時過ぎに御礼のメモを残し、「Kさん宅」を出発。少し、バックしたところに“タイムリー”があったので、おにぎりサンドイッチ、ジュースで朝食を摂り、昨日同様ロックアイスを買って、ボトルに詰め込んだ。国道19号線沿いにあった「野尻宿」の看板には灯りが点いていた。昨日のゴール地点である野尻駅まで歩き、スタートする。今日は暑くなりそうだ。しかも木曾川沿いの国道19号線中心なので日陰は少ないと思う。田舎なのでお年寄りの朝は早い。野尻宿にはほとんど案内がないので主なものは見落としてしまったようだ。外れになると立派な家が多い。くねくねとしたアップダウンの枡形を進み、JRの踏切を渡ると平坦になった。少しだけ走るが汗が滴り落ちるので、道端で顔を洗う。水が豊富なので助かる。



JR沿いに進み、再び踏切を渡る。国道19号線に合流すると右手に「道の駅・大桑」が見えた。地図では一旦、国道から外れるようになっているが、実際はかなり逸れるようで間違っているように思えたので、真っ直ぐ進み、道の駅に入って自販機に寄る。トラックや乗用車が数多く止まっていた。夜中走って、仮眠しているワゴン車もあるようだ。そうか、夏休み真っ直中だった。身体が重く、今日は昨日以上に走れそうにないと予感する。実際その通りだった。国道19号線の歩道を進む。左の木曾川対岸を見ると少し雲の掛かった山下の緑の中に建っている家々が何とも言えない落ち着いた雰囲気を感じる。木曾川は濁っていたので、前夜上流ではかなりの雨が降ったのかもしれない。



関山まで進むとJRを横断して、山の方に向かうことになる。まだ国道は通りが少ないので楽に横断できた。早朝から救急車が私の行こうとしている方向に入って行った。大桑駅前を通り、右折するとややきつい上りが続く。右の高台に大桑村役場が見えた。この辺りも、どの民家からも山水が軒先から湧き出していた。中集落の右に「天長院」があった。ここの



石仏の中に「マリア地蔵」といわれている子育て地蔵があるそうだ。右の塔は中国風の建物に思えた。保育園のところで左に折れて、今度は下って行く。山間の農村集落が続く。6時半頃だが、朝は湿度が高いのでびしょりだ。その先の交差点を右に曲がると街道らしい雰囲気になる。ここにも丸太ん棒をくり抜いたものではないが、真新しい水舟が





あったので口にし、顔を洗う。まだ6時台だが、田舎の老人の朝は早く、人の行き来も頻繁だ。坂を下って行き、伊奈川に掛かる「伊奈川橋」を渡る。右の高台に「岩出観音堂」が見える。崖の上にある「岩出観音堂」は懸崖造りで木曾の清水寺といわれる立派なお寺だった。

この先は街道らしい雰囲気になって来た。少し進むと「須原宿」の入口で名物の木曾檜をくり抜いて軒先に井戸として利用されている大きな「水舟」と「須原宿」の案内板があった。軽トラックの老人が「地図がないなら持っているよ」と大桑村のパンフレットを出して下さったが、あいにく地図



はあるのでお断りした。その横には「定勝禅寺」という立派なお寺があった。臨済宗妙心寺派で永享2年(1430年)創建の歴史のあるお寺だ。石段を上って行くと整備された綺麗な庭園があった。宿の中心部に差し掛かると「水舟と子規歌碑」があった。これが須原の代表的な景色。子規の歌碑と水舟、年月を感じさせてくれる木の匂いが心なごませてくれる。子規歌碑には『寝ぬ夜半を いかにあかささん山里は 月出つるほどの 空たにもなし』と刻まれていた。向かいには元脇本陣の「西尾酒造」が



あった。立派な杉玉の酒林が下がり、菰樽が積み、地酒蔵元木曾のかけはしの旗。屋敷の前には碑と解説板。写真を撮ったつもりだが、メモリされていなかった。この向かいが本陣跡のようだ。この辺りの家並から屋根のトタンは青や赤を使っている家が目立ち始めた。「須原名物桜の花漬け」と書かれた店もあった。須原駅前を越えて進むと国道19号線と合流、須原宿の出口だ。



この先は国道19号線から逸れたり、合流したりして進む。昨日と違って晴れているので朝から暑い。7時半になっていた。国道の車の量が一気に増え、歩道を進んでいても排気ガスで余計に身体が火照る。国道19号線の右手にJR中央西線の線路があるが、旧道は線路が邪魔して道なりに入って行くところがわかりにくい。それに比べ、木曾川側の左手はわかり良い。上郷で左手に“タイムリー”があったので入って水分補給する。池の尻で山手に入って行く途中から草道となり、そのまま進んだが、行き止まりだったので引き返す。国道付近は中山道の案内が一切ないので、迷ってしまう。山手は草道になれば、左の線路側に降りれば良いようだ。国道19号線に出ると大桑村から上松町に変わり、標高588mの表示があった。スタートの野尻からは60m上っていた。倉本駅の北までは山手の旧道が中山道だが、入口がわからず、国道を進んだ。倉本駅前には12.5kmくらいだが、2時間20分ほど要していた。先が思いやられる。歩きであっても、もう少し早く進みたいのが本心だが事は順調に進まないものだ。倉本駅も無人駅だった。

立町は集落で店もあった。信号で右に折れて、旧道を進む。そのまま進んでも途中で行き止まりになったり、わからずに国道19号線に戻ることもあった。全く中山道の表示がなく、道なりともいえないので大変だ。「神明社」を越え、萩原の集落から国道19号線に出るところに「萩原一里塚跡」があった。江戸へ73里、京へ64里と

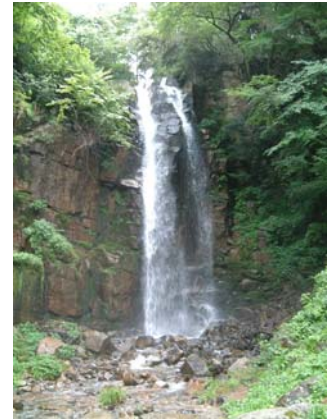




案内に書かれていた。歩道を先に進むと「小野の滝」が見えた。国道19号線の脇にある。冷気が気持ち良い。中年夫婦が反対側から歩いて来られ、写真を撮られていた。「**小野の滝**」は木曾八景の一つに数えられ、高さ9mで浮世絵にも描かれた名瀑布といわれているようだ。この先ですぐに右折しなければならなかったが、気づかずにそのまま国道を進んでしまった。滑川に掛かる橋の手前で気づき、右に入って旧道に進もうとしたが、全て行き止まりで仕方なく、そのまま「寝覚の

床」を目指すことにした。滑川の手前左側には「タイムリー」があった。もう9時を回り、暑くてたまらなくなっていた。交通量の多い国道はこれほど疲れるものか。上松に入ってから緩い上りが続いていたことも影響したのだろうか。

国道19号線は右に大きくカーブし、きつい上りが続いた。左に「寝覚(ねざめ)の床公園」の案内があったので入って行くと駐車場があり、「裏寝覚」と「寝覚の床」の方向を示す案内があったので、寝覚の床方向に向かう。手前から入ったのでここからは遊歩道で結構遠かった。ようやく「**寝覚の床**」が見えた。



雄大だ。中央西線の「ワイドビューしなの」で「野辺山」や「甲州夢街道」に向かうと必ず車内放送で説明があるところだ。曾川の激流が花崗岩を削り、永い年月をかけて現れた奇勝で、中山道時代から旅人が訪れたそうだ。ここには浦島太郎の伝説があり、「**亀を助けて竜宮城へ行った話は広く知られているが、故郷に帰った太郎が、親兄弟は勿論、誰一人知る者がなく淋しさに耐えかねて旅に出た。たまたま、この美しい里に足を止めて、その景色が気に入りこの地に住み着いた。しかし、竜宮の生活が忘れかね、今一度、乙姫様に貰ってきた玉手箱を開けると、立ち上る**

白煙と共に白髪のお翁となった。"ああ今までのことは夢であったか"と目が覚める想いであった"ということから、

この里を"寝覚め"と言い、床を敷いたような岩を見て、人は"寝覚ノ床"と呼ぶようになったそうである。足場に気をつけながら、岩を見に行くと吸い込まれそうな感じになった。白く角張った大きな岩々に、コバルトブルーの木曾川、素晴らしい。ここで長野県職員に口頭でアンケートを依頼された。「寝覚の床の美術公園をどう思われますか?」「この北の方に新しい道路が作られる計画がありますが、どう思われますか?」など質問されたが、「私は中山道を旅している者で地元のことにはよくわかりませんが、寝覚の床自体が大自然の美術品なので、そこに人工的な美術公園があっても旅行者は見に行かないでしょう。美ヶ原にも高原美術館がありますが、自然の中の美術館って、パッとしませんね」「道路は税金で作られるので、必要なら作れば良いけれど、人も通らないのに広い幅の歩道を作ったりしているところがあります。意味ないですよ。必要な部分と不必要な部分の見極めが大事でしょう。それと本当に必要かどうかでしょう」と答え、岩から戻った。



白煙と共に白髪のお翁となった。"ああ今までのことは夢であったか"と目が覚める想いであった"ということから、



急坂を上って行くと頭上にある中央西線からは寝覚ノ床は見やすい位置にあるとわかった。今度は真っ直ぐに上って行くと「臨川寺」というお寺があり、境内を通ると近道だが、参拝料を貰うと書かれていたので、違うルートを進む。上ったところは駐車場でエンジン掛けっぱなしのバスから出る排ガスの暑さで気分が悪くなるほどだった。こんなに夏の排ガスがひどいかったとは改めてびっくりした。ここが「寝覚の床」の入口のようだ。

正規の中山道に戻らなくてはならないので、国道19号線を横断すると交差点の角に「長寿そばの越前屋」があった。寿命そばとは寝覚の床に戻ってきたという浦島太郎の長寿に因んで名付けられたもので、『続・膝栗毛』で野次、喜多が名物のそば切りを食べたところとして有名な店である。山手に坂を上って行くとようやく中山道らしき街道に突き当たった。ここを左折して「上松(あげまつ)宿」に進む。この辺りは山に近いので坂が多く、石垣が積まれている家が非常に多かった。見帰で国道19号線のバイパスができたようで、右手はトンネルになっていた。

中沢橋を越えると夏祭りのまといのような色鮮やかな飾りが見えて来た。「諏訪神社」の夏祭り準備のようだ。

坂を下ったところまで道路の両側に飾られていた。石段を上ったところは学校のグラウンドで、その奥に社が見えた。この辺りから、中山道とは書かれていないが、案内板が目につくようになって来た。「藤村文学碑」と「茂吉歌碑」があった。島崎藤村文学碑には『山はしつかにして性をやしなひ 水は動いて情を



やしなふ 洒落堂の記より』、斎藤茂吉歌碑には『駒ヶ嶽見て そめけるを背後にし 小さき汽車は峡に入りゆく』とあった。その先を右に進むと「駒ヶ岳登山道」となる。上松の雰囲気は街道らしさは残っているが、全体としては静まりかえっている感じがする。「玉林院」という立派なお寺が右へ少し入ったところにあった。木曾義元の次男玉林が創建し、山門鐘楼は明和3年(1766年)の落成とかの立派なものだった。その先で滋賀ナンバーの乗用車を発見し、郷土愛に目覚める。上松宿の出口付近には古い家並が昔の姿を伝えていた。その先の「十王橋」が上松の出口となる。



ここからは旧国道19号線を進む。車はほとんどバイパスを通るので、こちらはガラガラだった。笹沢でバイパスと合流し、国道19号線は急に車の往来が激しくなった。しかも歩道がないので怖い。旧道の入口を探すかわからなかった。ところどころに橋があるが、そこを通ると冷気は気持ち良い。道路脇が狭くなっているところでは歩くより走る方が安全と頑張って走った。途中、山手に中山道らしき道が見えたので、JRを横断して進むと街道に入れた。木で隠れるようなところでパトカーが休憩していた。警官は1人で仕事しているようには思えなかった。新茶屋から国道19号線に戻ると今度は歩道があった。木曾川を左に見ながら、汗びっしょりで進む。暑さと走れないことで焦る。どこで終えるか思案し始める。気温は27℃を示していた。対岸には「棧(かけはし)温泉」の建物が見える。木曾川に掛かる赤い橋も見えて来た。「木曾の棧」の案内もあった。赤い橋を渡ると木曾川の冷気が肌を冷やしてくれた。対岸には「子規歌碑」「お地藏さん」





があった。木曾川対岸から見ると山が谷に迫って、右に緩いカーブをするところが「木曾の棧」と呼ばれている  
そうで、山腹の急斜面を横切る道を補強するための橋という意味だ  
そう。ここは昔は難所だった。道路の下に昔の石積みが見える。ここも木曾八景のひとつだが、近江八景を真似て木曾八景とした  
そう。時計を見るともう11時。本日は23kmほどで5時間掛かったことになる。この時、早めに帰ろうと決心する。



国道を進むと右に入る旧道のところに「沓掛一里塚跡碑」があった。小さな丸い石碑で見落としそうな大きさ  
だった。神戸南までは旧街道を進めたが、その先で旧道がわからず、国道19号線に出る。左側を見ると御嶽山から流れてくる王滝川が木曾川  
と合流していた。喉の乾きを辛抱していたが、ようやくガソリンスタンドが見えたので冷房の効いた事務所で飲み物を2缶飲んだ。「御嶽山遥拝  
所」はどの辺りか尋ねると「もう過ぎてしまった。JRの上の山中」と言われた。「中山道を歩かれているのですか」と尋ねられた。「一応ランナーで  
すが、走れないランナーです」と応える。ひのき傘を背中に下げているとウォーカーの中山道散策者と見られるようだ。木曾路のパンフレットがた  
くさん置いてあったので貰う。



できる限り旧街道を進もうとその後も地図をしっかりと見ながら進む。一旦、JR高架下を潜り、国道19号線に出  
たところの信号が「木曾大橋」だった。1997年8月、「御嶽スーパー  
ライアスロン」に参加した時、国道19号線から、この橋を渡って三岳村に  
行ったことを思い出す。あれからもう7年が過ぎてしまった。山といえば今  
月末には「立山」があり、パノラマをととても楽しみにしている。再び、右の  
旧街道に入って行くと薄気味悪いトンネルが見えた。出口が見えないの  
で、このまま行って大丈夫なのか不安だったが、とりあえず進むと右にカ  
ーブしていたので出口が見えなかつただけだった。ここは旧鉄道トンネル  
のようで200mほどあった。出た途端に頭上を国道19号線の高架があ  
った。ここもバイパスになっているみたいだ。この先は旧国道と国道19号線バイパスの間を進むことになる。あ  
まりにも殺風景でこれが中山道かと思うところもあった。案内はところどころにあるが、わかりやすく書かれてい  
ないし、道なりでないので戸惑う。時には行き止まりでバックすること  
もあった。戸惑いながらも坂を下っ  
て行くと旧国道に出られた。久しぶりに賑やかな街並を見た思いだ。  
木曾福島を中心街にはSATYの  
表示もあった。少し行ってから、中  
山道の表示があったので、狭い用



水脇を進むと「塩淵公民館」の前に「案内板」と「塩淵一里塚跡碑」があった。一里塚跡は小さな石碑だった。

一旦、国道19号線に出たと思うとすぐに右に上る坂があり、上に「木  
曾福島駅」があった。ここは「ワイドビューしなの」も止まり、御嶽参拝者  
の玄関といった感じの駅で中山道宿場のイメージを彷彿させる駅だった。  
駅の右側には「御嶽神社大本庁」があり、小さな神社だが、バスで来られ  
た白装束の方々が参りされていた。御嶽神社は三岳村にあるそうだが、  
この神社はどういう位置付けかわからなかった。帰りの時間を調べなが  
ら少し休む。時間は12時を過ぎていた。この時点で次の原野駅で本日  
の中山道の旅を終えようと決めた。原野で止めて、14時頃の電車に乗





ろうと決める。

駅から下って行き、ややこしい道を案内や地図に従って進むと宿場らしい古い立派な家並があった。この辺りの民家の前にも豊富な水が出ていた。その先には「木曾福島観光文化会館」があり、前には小さな水車が回



っていた。中を覗いて見たが、中の資料は少なかった。下り坂に「高礼場」があった。その先はややこしく狭いところを進むと本陣跡の「福島町役場」があった。本陣跡の面影はなかったが、「木曾おどり」の赤提灯が印象的だった。夏祭りのようで役場の前には屋台が何台か置かれていた。夏の観光シーズンに併せ、木曾節や木曾踊りを広く普及、宣伝する目的で町では昭和の初めから行われているようだ。更に進み、国道361号線に出ると商店街の店先にはまといのようなぼんぼりが飾ってあった。綺麗な歩道のある国道361号線を進むと赤や青のトタンの屋根の家々が木曾川の両側や山のすそ野にかけて色鮮やかに広がっていた。雪の関係でトタン屋根にしてあるのだろう。



このまま真っ直ぐに進み、右の坂を上って行くと「福島の関所」があった。その手前には「高瀬家」があったが、ここは通過した。高瀬家は山村家の臣で代々関所番を勤め、島崎藤村の姉園の嫁ぎ先で作品『家』のモデル



となったところである。「福島の関所」は門が両側(西門、東門)にあり、史跡公園として木曾川の斜面道路から高く聳える石垣の上に関所が復元された。遠州新居関のように入り鉄砲と出女が取り締まられ、関守は尾張藩の木曾代官として木曾の森林を預かり大きな権力を持っていた山村甚兵衛が勤めていた。かつてここは山の中腹に位置し、重要な役目を果たしていたようだ。その先に道路を跨いだ大きな「冠木門」が見える。ここで福島宿は終わりだ。その冠木門の手前に「かしわや」という食処があったので入る。店の外にソースカツ丼と書いてあったので食べたくなった。確か、この近くの駒ヶ根はソースカツ丼で有名だと思う。しかし、カツはもうなくなり、残念ながらソースカツ丼に





はありつけず、ざるうどんに生ビールでゆっくり食事した。生ビールが美味しかった。久々の食事らしい食事で170円だった。この頃に雷が鳴り初め、空もやや暗くなり始めた。もう13時を過ぎていた。冠木門を潜って国道に出る。その先の福島トンネルとの合流点の三叉路から国道19号線に戻った。

ちょうどその木曾川を隔てた北側に木曾義仲の墓のある「興善寺」がある。滋賀の膳所にある「義仲寺」も木曾義仲の墓があると聞いている。「義仲寺」には松尾芭蕉の墓もある。有名な人は墓もあちこちにあるのだろう。その横にある「木曾福島郷土館」は木曾谷全般の知識が得られるようになっているようで、今回は行けずに残念だった。太田水穂の歌に『山蒼く暮れて 夜霧に灯りをともす 木曾福島は谷底の町』と歌われているように木曾福島は谷底の町だ。ここからは国道19号線の右側に出たり、左側に出たりしながら、原野を目指す。冠木門を過ぎて1kmほど行くと“タイムリー”があった。小雨が降り出してきた。風も出て、走るには気持ち良い天気だが、気分的にもう全然走れない状態だった。

旧街道らしい雰囲気の中を進むとこじんまりとした赤い鳥居が見え、石段の上に「**手習天神**」があった。木曾義仲を養育した中原兼遠が義仲の学問の神として京都の北野天神から勧進したものとわれ、境内の「イチイの古木」は銘木として知られているそうだ。栗本で一旦国道に出ると標高843mの表示が出ていた。どんどん上って行っているようだ。ここで木曾福島町から日義村に変わった。田舎らしい集落を過ぎて行くと



「**中山道中間点**」の案内板があった。確か、ガイドブックには標柱の写真があったが、残念ながらなくなっていた。ここは江戸、京都双方から67里38町(約268km)で中山道の中間点にあたる。横には地藏

さんなのか何かわからないが、「**水神**」と刻まれた石碑があった。天気が良ければ中央アルプスが望めるのだが、曇っていて何も見えない。真っ直ぐに進むと**原野の家並**が見え、街道らしい雰囲気が偲ばれる。原野駅で終えることに決めたが、駅がわからず、真っ直ぐに進む。地図とにらめっこしても駅がわからない。このまま宮ノ越宿まで進んでしまう手もあったが、風呂にも入りたいし、余裕を持って帰路に就きたいので無理しなかった。元の道に戻って行くと**原野駅**の表示があった。14時03分到着できた。結局本日は33kmだった。



駅で顔を洗って、地図を見て、缶コーヒーを飲みながら、一息付く。20分ほど待って電車が来た。ドアが全て開かないので入るところに狼狽えた。全体でドアは一カ所だけ開いていた。窓越しに通って来た道を眺めながら、木曾福島へ戻る。50分待ち時間があるので一旦降りて、HPで調べた代山温泉「木曾宿」の風呂に行く。冷泉のようだが、鉄分を含んだ感じの色に思えた。湯船は熱く、水を被ってばかりいた。再び、**木曾福島駅**に戻り、つまみにビールを買って、車内で飲もうと考えた。15時28分の電車に乗る。しかし、いざ電車に乗るとどの席も満席でビールどころ

ではなかった。どうしようもない。結局、ビールが飲めたのは中津川発の電車に乗ってからだった。途中の河原で花火大会があり、浴衣姿の若い女性の姿が車内でも多く見られた。名古屋でも都合良く、時間ロスなしに米原行きに乗れた。結局、家に着いたのは20時半と思ったより早く帰ることができて良かった。

2日間の中山道は予定の102kmに対し、結果は73kmしか進めなかった。真夏の街道は思った通りにはいかない。宿の準備もせず、行き当たりばったりはあまりにも無謀だったとしか言いようがなかった。だが、





幸いにも通りすがりのお宅に一宿一飯の義理になってしまい、本当に田舎の人情には頭が下がる思いだった。有り難かった。この旅人の心を忘れずに今後も街道旅を続けたいと思う。地図作りから始まる街道走り旅、今回の中山道でようやく半分まで来られた。遠くなるに従って辛くなることが多くなる。しかし、時間が掛かっても続けていこうと思う。今回の木曾路の山岳コースは素晴らしかった。また行ってみたいと思う。